慰霊碑の前での「正しい」頭の下げ方について
―現代史 B での慰霊碑を調べるレポートを事例にして―

高江洲　昌　哉

はじめに

2025 年は戦後 80 年ということで，以前にもまして戦争の記憶をめぐる問題が議論されている。こうした問題のなかに，体験者の減少による継承の問題がある。筆者は継承の問題に対して，シラバスで「君たちはボイスレコーダーではない」と，経験者の語りを「正しく」伝えようとする傾向に対しては距離をとる立場をとっている。それは，従来の継承の議論が，「話す側」に重点を置いていたが，聞く側に重点を置いた考察も必要ではないかという考えからである。本稿は，このような立場から慰霊碑を対象にした，継承の問題に関する授業実践となっている。

慰霊碑については，歴史研究や歴史教育も一定の蓄積[1]があり，多くは設置意図といった「調べ学習」的な内容で議論されてきた。本稿は慰霊碑について「調べ学習」ではなく，戦争の意味づけの継承に関する主体的な取り組みについて考察をしたものである。

具体的にいうと，筆者は現代史 B を担当して 10 年以上になるが，この間，コロナ下をのぞき，慰霊碑を調べるレポートを課していた。2022 年度に資料 1 のようなレポートが提出された。レポート文中にある「遊具で遊ぶ子供たちに，もっとちゃんと歴史と向き合え，というべきなのだろうか。遊具と記念碑

[1] 一例を挙げると，研究では中京大学社会科学研究所戦争の記憶と遺産の伝承プロジェクト編『戦争記念碑が語るもの』，中京大学社会科学研究所，2025 年），教育だと広島平和教育研究所編『今日から始める平和学習』（2020 年）がある。後者はネットで入手可能。

の間で，私は悩んでいた。どれくらい歴史と向き合えるかは，人それぞれ違う」という自問自答部分が興味深かったので，黒枠部分を使って，2023年度に資料2のような試験問題を作った。

戦後80年の2025年は，戦争を経験していない世代を中心に慰霊や継承の議論が活発になされてきたが，果たして，「慰霊や継承」に正解があるのだろうか。もし，正解がないとすれば，何のために議論をしているのか，こうした議論への参考に資することも考えて本稿を作成した。ちなみに，本稿のタイトルにある「「正しい」頭の下げ方」は，この試験問題に由来する。この回答の紹介だけでも与えられたページ数を使うこともできるが，「慰霊や継承」の問題を多角的に扱うため，同じく慰霊碑を調べたレポートを使った別の試験問題の回答も紹介する。

1：公園で遊ぶ子どもと慰霊碑の関係

はじめに，2023年度の試験問題のもとになった，2022年度のレポートを紹介したい。

資料1

今回のレポートを書くにあたって，私は「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」[2]に行ってみることにした。東京にある戦争記念碑をネットで検索したところ，予想していたよりも多くの記念碑が写真とともにヒットした。歴史を感じるようなシンプルな石碑と美しい花々が検索結果として並ぶ中で，ここは掲載されていた写真がとりわけ華やかで目を引かれた。今でも四季に合わせて花の植え替え等が行われているらしく，花壇のデザインも綺麗だった。調べてみたところ，都内の小・中・高校生が描いたデザイン画を基に植栽が行われているようだ。私が行った2023年1月のデザインは，「まずは自分から」

[2] 学生が選んだ碑は都立横網町公園のものである。この公園には「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑」もあるので，学生の中には，震災朝鮮人虐殺問題と合わせてレポートを仕上げる学生もいる。同じ慰霊碑でも，取り上げ方で様々な議論が可能になる。

と題して，幸せの鳥が宇宙全部を平和に染めていく様子を表現したものだった。設置されたはいいものの，日常の積み重ねの中で忘れ去られている戦争記念碑も多くある中で，この場所は人々の意識の中に残っている場所だと感じたのが，今回ここに行くことを決めた理由だった。渋谷から 30 分ほどの場所にあるというのも，足を運ぶハードルを下げてくれた。

実際に行ってみると，記念碑は公園の中にあった。そのすぐ近くには遊具も設置されていて，お昼過ぎという時間もあってかたくさんの小学生くらいの子供たちが楽しそうに遊んでいた。それはこの記念碑が祈念した「平和」そのものともいえる光景で，なんだか穏やかな気持ちにさせられた。記念碑は写真で見た通り，綺麗な状態で保たれていた。少なくとも，忘れ去られて放置されているような感じではなかった。しかし，どういうわけかその近くには人が全然いなかった。公園の中で子供たちは楽しそうに遊んでいるのだけど，記念碑の近くには寄ってこない。それどころか，見向きもしていない。彼ら彼女らにとってはそこにあるのが当たり前で，わざわざ意識すらしないほど日常の一部として存在しているように感じられた。そんな光景を眺めながら，ふと思った。忘れられていないということは，継承されているということなのだろうか？上にも書いた通り，花壇のデザインは小学生や中学生が応募したものの中から選ばれる。その過程では当然，平和教育が行われていることだろう。私が小学生の時も，学校で戦争についての話を聞かされた記憶がある。しかし当時の私が，戦争について，またそれによって命を落とした人たちについて十分に知っていたかと問われると，自信を持って頷くことができない。もちろん何も理解していなかったわけではないが，せいぜい「戦争はよくないことなんだな」とぼんやり思った程度だろう。しかもその意識すら放課後には消えていて，今日は何して遊ぼうか，そんなことを考えていた気がする。その姿勢は間違っていただろうか。叱責されるべきことだろうか。遊具で遊ぶ子供たちに，もっとちゃんと歴史と向き合え，というべきなのだろうか。遊具と記念碑の間で，私は悩んでいた。どれくらい歴史と向き合えるかは，人それぞれ違う。できない模範解答はいわない方がいい。そんなこの授業の話を改めて咀嚼していた。しばらく考えてから，

もう一度記念碑の前に行くことにした。こうして記念碑の前に来ると，どうしても戦争で命を失った人にばかり意識が向かってしまう。慰霊碑を見るのはこれが初めてではないが，以前までの私は戦争被害者のことばかり考えていた。しかし歴史とは一方的なものではないこと，様々な立場の人がいること。戦争で命を落とした人だけではなく，生き残った人，大切な人を失った人，相手国の兵士，またその家族，さらには作戦の妥当性まで，そういった多くのことについて慰霊碑の前で考えたのはこれが初めてだった。もう一度遊具の方をちらりと見てから，私は公園を後にした。記念碑に目を向けることなく遊んでいるあの子供たちも，いずれ少しずつ歴史の理解度が更新されていくことになるだろう。そしてその際には，あまりにも当たり前に日常の中に溶け込んでいたこの記念碑が，今回の私のように，新しい意味を持って彼らの目に映りこむ。日常と歴史が繋がって，戦争について考える重要な架け橋になる。慰霊だけが目的ではない。反省だけをしていればいいというわけでもない。それを両立させる記念碑の意義について，実際に足を運ぶことによって感じることができた。

資料 2

問題 1：以下は昨年のある学生のレポートの一文である。平和公園で遊びに熱中する子どもを見ながら，日常（遊び）と平和祈念の格差をどう埋めるのか，悶々としているところでしょうか。あなたはどのように続きを書きますか。続きを書いてください。

以下，レポートの引用箇所は資料 1 の黒枠部分と同文のため，省略

資料 1 の学生は，慰霊碑を前にして，戦没者だけではないことを想起し，また「日常と歴史が繋がって」いることを確認し，「戦争について考える重要な架け橋になる。慰霊だけが目的ではない。反省だけをしていればいいというわけでもない。それを両立させる記念碑の意義について，実際に足を運ぶことによって感じることができた」としている。気づかないことを一概に否定せず，自己内対話をはかり，慰霊碑の沈黙を通して，多様なつながりを考える内容に

なっていた。

それでは，次に，2023 年度の回答を紹介したい。この問題の回答では，子供たちに「気づくよう」能動的に働きかけるという回答と，子どもたちが「気づかない」ことを問題としない（または気づくまで待つを含む）という回答の 2 つのタイプにわかれていた。また，後者については，無関心である，戦争を意識しないことが平和の帰結であると，無関心を肯定的に評価する意見と結びついていた。

回答 A

もしも放課後に遊ぶ前，小学生全員が記念碑にお祈りをしてから遊ぶような風潮があるとするならば，それは不気味なことであると思う。そして，そのような常にお祈りをする教育がされているとするならば，その教育はものすごく強大な愛国心・ナショナリズムを形成し，それによって再び平和が消えて，戦争のようなことが起きてもおかしくないだろうということだ。歴史に向き合うことは大切だと感じるが，このように他人によって強制されるべきものではないだろうと感じる。

回答 B

もし，今遊んでいる小学生たちが記念碑をじっと眺めて記念碑について話し合っていたらどうだろう。正直薄気味悪くて私は苦笑してしまうだろう。やはり小学生には何にもとらわれず自由に楽しんでいてほしい。…略…もし，ちゃんと歴史に向き合え，と子供たちに言ったらどうなるのだろう。子供たちはまだ価値観や倫理観がしっかりと形成されていない。きっと向き合えと一種の「強制」をすることによって，偏った価値観を植え付けてしまうだろう。これは，戦争時代の思想の植え付け方と同じになってしまう。それだけは避けなければならないと思う。

回答 C

何も考えずに，遊ぶことがもし悪いとすれば，記念碑に黙祷でもして遊び始めればいいのだろうか。それでは子供たちは平和公園に赴かなくなるのではないだろうか。記念碑も何もない一般的な公園でしか子供たちが遊ばなくな

ったら本末転倒なような気もする。ならば平和を願った公園で子供たちが戦争のことに想いを馳せず，走り回っている方が本来願われた意味なのではないかとも考えた。…略…まだ小学生くらいの子供に戦争のことを忘れるな，というのはやりすぎという感覚は否めない。

他方，自身の経験を踏まえて，忘却していたけど思い出すというように，長期的スパンで碑が存在する意味を書いた事例もあった。

回答 D

私が小学生の頃，課外授業で近くの防空壕にいく機会があった。ガイドの方がいて戦争の悲惨さを語ってくれたが，その頃の私は防空壕から出てしまえば内容も忘れてしまった。しかし，中学生の頃に戦争を卒業論文のテーマにした私は，再びその防空壕を訪れた。そしてガイドの方と一対一でお話ししたことで，やっと戦争の歴史にしっかり向き合うことができた。そして，歴史を学びたいと思った時，すぐ近くに学ぶことのできる場があったこと。歴史を継承するために無償でお話しをしてくれる人がいたこと。そのことがどれほど有難いことなのかということに気がついた。…略…日常の中でふと歴史に向き合うきっかけをつくる記念碑はとても重要な役割を果たしているのではないかと思う。

また，「考えること」と，そこから導き出される回答を「正解」か「不正解」かを判定することに距離をとる回答もあった。

回答 E

どれくらい歴史に向き合えるのかは，人それぞれ違う。悲しいことに，戦争で多くの人が亡くなっていても，自分には関係のないことだと興味の無い人もいる。一方で，戦争の悲惨さを語り継いでいきたいと活動している人もいる。大切なのは，未来を担う子どもたちが戦争の悲惨さをさらに後世に語り継いでいってくれることだろう。「戦争はよくないことなのだな」，その意識が放課後には消えていたとしても，今はそれでいいと思う。遊具で遊ぶ子ど

もたちに，もっとちゃんと歴史と向き合えというべきではない。歴史と向き合うのは自分自身が向き合いたいと考えるようになった時からでいいと思う。時が来るかは分からない。それでも，私が今書いているように考えられるようになる日が来るかもしれない。そして，気づいた。模範解答はいわないのではない。模範解答は存在しないのだ。誰にとっても正義の回答など存在しないのだから。

もちろん，能動的に働きかけて「正解」を教えるという意見も一定数あった。ここでは，「模範解答」的ではないものを選んで紹介した。ところで，こうした回答の違いは，「正解」を教えることと，「正解」はないという姿勢で教えることの違いになるかと思う。こうした断絶は，対話不能なのか，それとも架橋可能なのか。こうしたことも考えながら，平和を考える視座が豊かになるのかもしれない。

2：満洲開拓移民の「労苦」への眼差しと評価

次に紹介する資料は，満洲開拓移民の拓魂碑を調べた日本人の学生と留学生のレポートを読んで考察するという 2024 年度の試験問題とその回答である。ここでは満洲[3]をめぐって当事者ではない世代の日本人（加害国側）と中国人（被害国側）の学生が満洲移民の「苦難の歴史」を伝える碑をどう評価したのかを読み比べたうえで，別の学生がどのように考えたのか確認していく。紙幅の関係で，いのはな慰霊碑のレポートは省略し，拓魂碑のレポートも一部省略している。ただし，引用文のなかには，引用箇所には八王子のいのはな慰霊碑のレポートが述べていた，民間人を攻撃したアメリカ兵を許せるのかという考察を踏まえて，言及しているものもある。この点ご承知の上，読み進めていただきたい。

[3] 資料 3 のレポートにある「満州開拓殉難者之碑」及び「満州」の表記はそのままにしてある。

資料3

問題1：以下は第5回で紹介した2023年度のある学生のレポートの一文です（八王子市のいのはな慰霊碑）。この箇所と添付の資料（拓魂碑，満洲開拓移民団の慰霊碑を調べた日本人，留学生のレポート）を参考にして，慰霊と反省と両立について考えたことをまとめてください。

○日本人のレポート

私が訪れたのは，多摩市の都立桜ヶ丘公園にある慰霊碑，「満州開拓殉難者之碑」だ。この慰霊碑はその名の通り，1932（昭和七）年に始められた満蒙開拓で亡くなった人々を祀るものである。周りは犠牲になった人々の名前が書かれた石碑で柵のように囲まれている。私がこの拓魂碑を選んだ理由は，自宅から車で10分ほどで行くことのできるところにあるからだ。公園自体には何度か訪れたことがあったが，そこに慰霊碑があることは知らなかった。…略…私が個人としてこの拓魂碑を訪れた感想を述べると，それは「どういう感想を持つべきなのかわからない」だった。感想に正しいも何もないとは思うが，誰の視点で見るかによって捉え方は変わるからだ。満蒙開拓で犠牲になった人々のことを伝えるものとして重要だとは思うが，侵略を受けた側の人々がどう感じるのかはわからない。この文について，日本と満州，そして開拓者という三つの視点から考える。まず，日本という国から見ると，…略…結果として27万人のうち8万人が命を落とした。そういったことを考えると，「満州開拓殉難者之碑」の碑文は故人を悼むものとして相応しいもののように感じられた。次に，満州現地民について考える。…略…彼らから見れば日本は侵略者であるともいえるのだ。このことを鑑みると，慰霊碑に書かれた言葉にはあまり良い印象を持たないのではないかと感じた。「地と汗の建設」という言葉は日本人の努力を表しているように感じられるが，日本にとっての「開拓」という努力は，彼らにとっては侵略への道程なのである。最後に，実際に開拓に向かった移民たちから見るとどう感じられるのか考えた。私には，開拓民たちは被害者であり加害者だと感じられる。…略…そういった複雑な立場から考えると，「地と汗の建設が一瞬で崩れ去った」というのは，被害者的立場から見ればそれま

での働きが無駄になり家族や友人を失ったという経験を後世に伝えるものとして意義のあるものであると思う。一方で，加害者の立場から考えると，この文言では不十分に感じられる。…略…犠牲になった人々を慰めるために建てられる石碑である慰霊碑に，わざわざその人たちの加害者的側面を記すべきではない。すべての出来事，人間には数多の側面があるが，犠牲は犠牲という一つの事実であり，誰かの死を悼むのに否定的な言葉は必要ないからだ。しかし慰霊碑を訪れたことをきっかけとして，歴史の授業で数行で終わるような満蒙開拓団，満州と日本の関係について知る機会を持つことができた。そして日本の加害者的側面を知ることも大切だと改めて感じる。…略…私が今回のレポートを通して考えたことも一部でしかない。満州で亡くなった人たちのことを悼むと同時に，満蒙開拓という出来事のさらに多くの面を学び，考え続けていきたい。

〇留学生のレポート

私は現在以前授業内でも話が出たことがある聖蹟桜ヶ丘という地域に居住しており，‘聖蹟’桜ヶ丘の由来を知ってからは地域の歴史にも興味を持ち初め，工事を行っているため現在は入れないものの桜ヶ丘公園の多摩記念館を訪ねたり，明治天皇行幸所対鴎荘の跡を訪るなど地域の歴史と関連がある場所を調べていたが今回の課題にあたって今まで自分が知らなかった史跡があることに気づき拓魂碑を訪問すると決めた。

場所の選定は早い段階で終わったものの，具体的に拓魂碑がどのようなものなのかについては知識がなかったため，まずはネットを通じて下調べを行った。…略…満洲開拓者を祀る石碑であることを知った際は少なからず反感を抱いた。

私にとって日本と満洲と言えば満洲事変や日本軍による傀儡国家の樹立という悪印象しかなかったため，それに加担した者達を祀るということにも自然と反感を感じた。あまり気が乗らない場所に行ったところで文を書ける気もしなかったため選定地を変えようかとも思ったが NHK のネット記事を参考にして認識を改めた。…略…

拓魂碑に祀られている人々は虐殺を行った軍人でも，国の拡張のため戦争を

命じた戦犯でもない生活を維持したかった普通の人々であると思いながら拓魂公苑に足を運んだ。…略…私は一回家に戻り，追加的に満州開拓，そして満州開拓と聖跡桜が丘との縁とは何なのかを調べた。…略…

そして，満州開拓の具体的なイメージがあまり頭の中に浮かんで来なかったため，映像資料を探した。そこで見つけた一つの動画には生き残りの人が伝える満洲での生活と彼の家族や暮らしの写真，満洲の風景などが写っていた。…略…映像の最後に彼は散々辛い思いをしたがそれでも満洲はいまだに自分にとって第2の故郷であると語っていた。日本で大学時代を送った私にもほんの僅かながら彼の気持ちがわかる気がした。第2の故郷とまで思っている満洲の地で忌み嫌われ追い出された彼らは，日本に帰ってからも引揚者と侮蔑され，茨城県の那須町に満洲の地名を由来とする千振という町を作って生活をしているという。彼らがどのような思いで毎年拓魂公苑を訪ねたのかを考えると自然と気が重くなる。

それでは，次にこの問題に対して，慰霊と反省の両立可能，両立不可，新しい視点を提示した回答を一部紹介したい。

回答ア（両立可能）

問題1のレポートを読み，慰霊と反省は戦争において必ず両立するものであると考えた。レポートを読む前は，慰霊碑に対する印象として，慰霊碑に名前が刻まれている人たちは自分たちの大切な命を落としているため，完全に”被害者”や”犠牲者”であると思っていた。だから，慰霊碑の前では手を合わせてその”被害者”たちを悼むということが当たり前の行いだと思っていた。しかし，以前の生徒さんたちのレポートを見て，慰霊碑をただ犠牲者を悼むものと捉えるのではなく，慰霊碑を様々な視点からとらえることが大切であることが分かった。…略…被害者と加害者という名を一人の人間に対してどちらか一つ与えることは難しいと思った。…略…慰霊碑について知り，学ぶことこそが大事だと気づいた。

回答イ（両立可能）

私たちが慰霊と反省の両立することとは，私たち日本人の戦争における被害者性と加害者性を両立すること。両方の視点から歴史を学び，捉え，考えることであると考える。授業内で，歴史に向き合うこととは，「一つの視点を超え，複数の視点で捉える行為」であること。恥じるべき，否定すべき過去であっても，残すべきであって，和解するためには，無くすのではなく，残さなければならないということを，…略…学んだ。私もそうあるべきであると考える。…略…

このレポートは満洲開拓移民が加害者性と被害者性の両方を持っていることを大変よくまとめられており素晴らしいものであると感じた。しかし，「誰かの死を悼むのに否定的な言葉は必要ない」という，言葉には少し違和感を覚えた。死というものの前では，彼らの加害者性というものは傍に置いておかれるべきなのであろうか。…中略…人は加害者性と被害者性を常に持っていると考える。歴史を学ぶときには，その両方を学ぶべきであり，その両方を学ぶことによって，慰霊と反省が両立されると考える。

回答ウ（反省があって追悼可能）

ここで，「戦争」という国同士の侵略行為に犠牲になった，すべての人間は供養の対象であり，石碑によって慰められるべきであるという考えが自分の中で浮かんできた。国同士の侵略行為によって行われた虐殺に兵士の個人的殺意は含まないとするのであれば，そこにある罪の意識は正しいといえると思う。…略…必要なのは，反省とそれを二度と起こさないとする努力である。この反省があってはじめて，虐殺行為をしておきながらも，自らも戦争の犠牲となった兵士たちの自国での弔いが成立することとなる。…略…加害者と犠牲者が混在し，複雑化している今，それがあってはじめて，石碑というものが意味をなし，「犠牲者を癒す」という本来の意味で存在価値を感じることができると思う。国際社会といわれるこの時代に，愛国心ばかりを優先し，自国の被害ばかりに目を向けることは，あまりに適切ではなく，被害者であり，加害者でもあった事実を忘れずに，その事実を抹消することなく，次世

代へと継承していくことこそが反省というものの現れであり，戦争で亡くなったすべての人に敬意を示す方法であると思う。

回答エ（反省が先で慰霊がある）

自らの罪から逃避し，それによって相手国の罪も咎められていないまま，慰霊碑だけを至る所にたてたところで，どれほど自国にもたらされた被害を慰霊できているのかということであると考える。以上を踏まえると，慰霊と反省は相反するものではなく，反省なきところに本当の慰霊は成り立たないと言える。

回答オ（反省は難しい）

正直私自身も慰霊の気持ちを持つことが出来たとしても反省という気持ちを持つことが出来るかと言われると難しいのではないかと感じる。去年の夏休み，鹿児島県にある知覧に行った。そこには当時の特攻隊員の遺書や資料などが多く展示されている場所があり，特攻隊員の方々が宛てた手紙に泣いてしまうことがあった。これは慰霊の気持ちであったと思う。しかし。特攻はアメリカに対して大きな被害を与えるものであったことは事実でありアメリカの隊員も多くの犠牲者を出したであろう。その事実に対して私は反省の気持ちを持つことが出来なかった。各国，過去にあった戦争について下の世代に伝える際，自国が被害にあったことを教えることが多い。そのため慰霊と反省の気持ちを両立させることは難しいのではないかと思う。

回答カ（慰霊が大事）

私は，戦争で命を落とした人々に対しての慰霊の念は湧くけれど，反省の念は湧かない。なぜ戦争を経験していない私たちに謝罪や反省を求めるのだろう。私たちには反省をする資格などない。当事者でないのに謝罪や反省の言葉を述べる人々に，なぜ反省をしているのかと問うと，「自分と同じ国の人が過去にしたことであるため」と愛国心や仲間意識から来た感情で言葉を紡ぐ人がほとんどだろう。それは果たして実際被害を被った人々に対して誠実であると言えるのだろうか。…略…

過去にしたことを全て正しいと開き直るべきだと言っているのではなく，

非難や謝罪の念を念頭に戦争を振り返ってはならないということだ。感情的になりすぎると，正しく戦争という出来事を認識することができない。愛国心の強い人は，当時戦った人たちに感情移入して，我が国の人々になんてことをと，相手国を激しく非難するだろう。だが，そのような感情を現代に生きる，戦争を経験していない人々に向けるのは無意味だ。…略…私たちにできることは，お互いを認め合い，戦争で起こった事実を学ぶことだ。そして，彼らが安らかに眠れるようにと祈りをささげることが重要だ。

回答キ（考えることが大事）

「できない模範解答をいう」ことは私の望むところでもなく，どういうふうに考えていくべきなのかと頭を悩ませる中，慰霊と反省の両立について思うのは，実は必要なのはこの「頭を悩ませること」なのではないかと思う。…略…実際私もこの授業を取らなかったらこんなふうに考えることはなかっただろうと思う。このような結論の出にくい，正解はないであろう問題提起のような教育を行うこと，思考の土俵に立つことがスタート地点に立つという意味で最も重要なんじゃないかと思う。

まとめ

回答を読んでお気づきの方もいるだろうが，この慰霊と反省の問題は，戦後 50 年のときに加藤典洋と高橋哲哉との間で起きた論争の再演の部分がある。加藤と高橋の議論が，順番をめぐる論争であったとすれば，当方の授業では，慰霊と反省の両立方法をめぐる様々な意見といえる。慰霊と反省をめぐる重点の違いは，戦争の歴史を継承する際に不可避にでてくる思考法なのかもしれない。そうしたなか「思考する」という発想は，解決を見つけるためだけの実践ではない。碑を見て歴史を思い出し，意味付けの論争が起き「頭を悩ませる」ことになる。つまり，「正しい頭の下げ方」があるのではなく，「頭を悩ませる」ことに意味がある。「継承する」とはこういうことであろう。